殺集団

宇能鴻一郎

新潮社版

斬殺集団

昭和五十年十一月二十日印刷
昭和五十年十一月二十五日発行

著者　宇能鴻一郎

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一
振替東京四―八〇八番

印刷　二光印刷株式会社

製本　神田加藤製本株式会社

定価九〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Koichiro Uno　Printed in Japan, 1975

斬殺集団・目次

豪剣ありき　五
双面の豹　三三
群狼相食む　七九
最強の剣　一一九
剣気奔る　一五八
非情の日々　一九四
女と血煙　二三二

装幀・宮田雅之

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

斬殺集団

豪剣ありき

松平忠敏が、あの無茶苦茶な男と会ったのは、鹿島神宮の境内においてである。
忠敏は肩衣を着し、神官に導かれ、従者をしたがえ、つつがなく参拝をすませたところであった。
静々と客殿にもどり、出された茶菓に手をのばしたとき、とつぜん、
ドーン、ドンドンドンドン
老杉をゆるがす大太鼓の連打が、とどろきはじめたのである。
障子も天井もビリビリ震える。神鹿はおそれて、泉水に飛びこむ。
「申しあげます」
と、若い神職が駆けてきて、白砂に浄衣の膝をついた。
「水戸天狗党のお武家が、乱暴をなさっておられます。は、拝殿の太鼓の、大きすぎるのが目ざわりだと申されて、鉄扇で……」
「鉄扇で叩いておるのか」
と老神職がつぶやいた。
「それにしては大きな音。よっぽどの大力と見える」
ふと、忠敏は興味をおこした。男が天狗党員だから、というのではない。

近ごろ世にうるさい勤王や佐幕の論議も、忠敏にはとんとつまらぬ。いずれも同じ穴のムジナの、出世欲さかんな奴ばらの、権力あらそいにすぎぬ、と思っている。攘夷を声高にわめいていても、権力の座につけば、コロリと変るに決っている、と達観しているのである。

欲もなく、ひたすら世のためを思って動いているのは、わずかに薩摩の西郷と……いや、そんなことはどうでもよい。

女にも名誉にもあきた忠敏が、この男に興味をもったのは、ただ、見せ物の大力男に対する関心にすぎぬ。

（その男に武術の心得があれば、怒らせて、手のうちを見てやってもよい）

とも思ったのである。

「行って、みますかな」

と、微笑して忠敏は立ちあがった。

神職一同の面に、喜色が浮んだ。

長袴の裾を蹴り立てつつ、長廊下を曲ってゆく。

と、拝殿の大太鼓の前に立ちはだかっている武士が目に入った。

風に向ってひろがるように、髷のハケ先を大きく結っている。

色白く、丈高く、でっぷりとしている。胸板厚く、腕は丸太のように太い。

その腕が長さ一尺の余はある大鉄扇をふりかざしているのを、五、六人の武士が、

「先生、先生、それくらいでお止め下さい」

とりすがらんばかりに、止めている。

「ええうるさい。そこのけ」

足をあげるとガッ、と蹴倒した。はずみに自分もよろめいたのは、昼日なかから、かなり酩酊していると見える。

鉄扇をかざして、太鼓をさらに一撃。

バリッ

異様な音がした。何たる腕力。ぶあつい牛皮は、この鉄扇の一撃で、ついに打ち破られたのである。

「わっはっは。愉快々々」

拝殿をおり、高足駄をつっかけ、高々と鳴らして立ち去ろうとする。五、六人の弟子もあわてて従った。

「しばらく」

と、忠敏は声をかけた。取りおさえるのは忠敏の役儀でもないし、その気もない。この男の傍若無人ぶりを、いよいよ面白く思ったからである。

「拙者か」

ふりかえる。小さな丸い眼が爛々とかがやく。まさに虎、である。

「左様。さきほどよりの御振舞、しかと拝見いたした。御存念のほどを、うかがっておきたい」

「返事が、欲しいか」

のっそりと、もどってきた。すさまじい威圧感である。

大ていの武士なら、抜きあわせぬうちにすくみ上るであろう。

「いただきたい」

「これが答え、だっ」

叫びと、ビュッ、と大剣の風を切る響きが同時であった。

抜く手も見せぬ、というか、実際にはめったにあるものではない。しかしこの男の抜き討ちは、まさにそれであった。

一瞬前、廊下を踏みならして忠敏は跳躍した。足の下を、烈風が走りすぎた。

欄干が、薪のようにはじけ飛んだ。忠敏の長袴の裾がふうわり、と男の顔にかぶさった。
急に身軽になって、忠敏は男の向うの白砂に飛びおりた。
長袴の裾は、欄干ごと、みごとに両断されていた。
足をちぢめていなければ、脛ぐらいは切られたであろう。しかし相手にこちらを殺す気はないことは、忠敏も見ぬいていた。
太鼓を叩き破る前はともかく、破ってしまうと、必ず一息ついた気分になったはずである。
その上、あらためて人を殺めよう、という気力を湧かすには、時が必要なものである。
だからこそ、忠敏はわざと彼を挑発したのである。むろん、彼を恐れたからでなく、神域を血でけがさぬために、それだけの配慮をしたのである。
しかし相手も、頭上をやすやすと飛びこえられ、己が切りすてた長袴の裾に目かくしされるとは、考えていなかったらしい。
忠敏が相手を斬りすてるならいまであるが、むろんその気はない。
男はようやく、袴の裾を払いすてた。虎に似た丸い眼には、ほんものの怒気がみなぎりはじめている。
機先を制して、忠敏は言った。
「いや、みごとな腕前、おかげで足首が涼しくなった。後日のために、尊名をうかがいたい。わたしは講武所師範役並出役、松平忠敏といいます」
武士は忠敏の名を聞いても、おどろいた様子も見せぬ。
パチーン
大剣を鞘に収めると、おもむろに白砂に片膝ついた。
「と申さるると、神君六男、松平忠輝君八代の子孫におわします、主税介さまにて」
「左様」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

相手もさすがに武士である。礼儀正しく、ぴた、と白砂に手をついた。
「御尊名はかねて承知つかまつっております。拙者儀は水戸浪士、天狗党員・芹沢鴨。知らぬこととは申せ、失礼の段、お許し下さいまするよう」
あれだけの乱暴を働いたあとというのに、悪びれず、落ちつき払い、少しも臆した風がない。
（よほど胆の坐った男であろう。……こんどの仕事にも、使えよう）
こうして忠敏はのちの新選組局長、芹沢鴨こと木村継次を知ったのである。

仕事、というのは少し前に、庄内藩郷士清川八郎なる者が、忠敏のもとに持ちこんできたのである。
「当今の形勢を見ますのに、あるいは勤王、あるいは佐幕を唱える浪士どもが江戸に、京都に集まり、物騒で仕方ありません。これを集めて一隊となし、市中取締りにあたらせるのはいかがでありましょうか」
忠敏は剣客として、多少は名を知られている。屋敷は牛込二合半坂にあるが、領地もなく、講武所からの俸給のほかに、国もとから年百二十万円ほどの援助があるにすぎない。
しかし芹沢が言ったように、忠敏はもともと将軍家の一門である。公式の席次は、諸大名の上座にある。
老中、大老とも、対等に口が利ける。彼らは大名をも呼捨てにするが、忠敏には〝殿〟づけで呼ぶのである。
その点を見込んで、清川八郎は、忠敏に口利きを頼んだのである。
よい案、というより、当然、誰かが思いつくべき考えである。
しかし、この清川八郎という男の人格には、疑問がある。
表面は幕府のために、といっている。老中も彼の名声は知っていて、すっかり信用している。

しかし忠敏の見るところ、この男はいつ寝返り、勤王攘夷を叫ぶかもしれぬ。それはそれで面白いが、忠敏の眼力をもあざむける、口利きの道具として使える、と思っているのが、笑止である。

浪士隊の隊長にはぜひとも、八郎とは対照的に、策を弄さず、腕が立ち、胆甕のごとき豪勇の士を、もってあてねばならぬ。

そう思っていたとき、はからずも鹿島神宮の境内で、芹沢鴨に会ったのである。

もはやためらうことはない。ただちに忠敏は、供回りをととのえて、登城した。

諸大名、茶坊主の目礼をうけつつ、継上下の裾をさばいて、溜りの間に通った。

直ちに老中、板倉周防守、政事総裁、松平春嶽侯に面会し、八郎の献策をとりつぐ。

献策が採用され、忠敏に浪士募集の沙汰が下ったのが、十二月十九日である。

忠敏は寄合席に列され、四百万円の手当を受けることになった。

さっそく忠敏は、若党に命じ、芹沢鴨の行方をさぐらせた。

結果は意外であった。

「芹沢さまは、近くにおられました」

「近くとは、江戸の中か」

「はい。……それも竜の口評定所の、武家牢に」

「何をしたのか」

「一つには例の、大太鼓叩き破りの件らしゅうございます。それは、

『太鼓を叩いて攘夷祈願をしているうち、敬神の念のあまり、つい力が入りすぎた』

と申し開きをされましたが、もう一つは、天狗党の部下を」

「部下三百名をあずかっている、ということであったな」

「そのうち三名が、いささか気に喰わぬ、と申されまして、潮来の宿で、土壇場に並ばせて、片

っぱしから首を斬ってしまった、とかで」
「困ったものだな」
ようやく老中を動かして、釈放させることができた。しかし本人は辞世の歌を小指の血で書き、牢の前に貼りつけて平然としており、放たれても、別に嬉しそうな顔もせぬ、という。
清川八郎の目付としてはうってつけだが、どうも短気で乱暴にすぎる。もっともこれくらいの男でないと、浪士たちの取締りはできまいが、これでは目付にさらに目付が必要ではないか。
腕をこまぬいているとき、内弟子が入ってきて、手をついた。
「殿様、この方々が、浪士隊に加わりたく、お目通り願いたいとのことでございます」
差しだした木の名札を見ると、
近藤勇
土方歳三
沖田総司
山南敬助
原田左之助
井上源三郎
藤堂平助
永倉新八
いずれも近くの、小石川小日向柳町にある町道場・試衛館の面々である。同じく剣に生きるものとして、忠敏は彼らの噂は聞き、性格も知っている。
たまたま忠敏は風邪をひいていて、その場は会わずに帰したが、その名札を眺めているうちに、とつぜん、
（この連中だ）

と思ったのである。
（この一党を、浪士隊に加えよう。この律義な、武蔵野の百姓出の連中なら、芹沢一派の行きすぎも、うまく抑えられるであろう）
「左様。上様には来春早々、攘夷のために京都へ上られます。その警衛のために、幕閣においては、誠忠勇猛の浪士諸君を求めているわけです」
説明しながら忠敏は、清川、芹沢、近藤らの性格を、脳裡で比較していた。
（清川の策謀、芹沢の奔放、近藤の誠実……いずれも名家の血すじに生れ、江戸ぐらしで贅沢に慣れた自分には欠けている、くっきりした気性だ。女にも名声にもすべてに興味をうしなった自分に、こいつらは何年かのあいだ、面白い見物を提供してくれそうだ。ひとつ、こいつらに深入りしてみるか）
たちまち、或る新しいもくろみが、忠敏の脳裡には組み上ったのである。
かくして翌、文久三年の二月四日、小石川伝通院において、新徴浪士の会合が行われることになる。ここではたして清川は、早くも策を弄したのである。
幕府の手当金は、一人百万円、五十人の予定であるのに、彼は二百五十人も集めてきて、
「集まったものは仕方ありませぬ」
とうそぶいている。
しかもよく調べると、忠敏が直接に誘った芹沢ら水戸藩の一派、近藤ら試衛館のほかは、行者、バクチ打ちなどがほとんどである。
清川に信用がないため浮浪の者しか集まらぬのである。
これは、忠敏がとうに見こしていたことである。いまは芹沢、近藤らを浪士隊に加えたことで、目的ははたした。あとはほうっておいても、この二派がいずれ浪士隊を掌握することは、実力から推して火を見るより明らかである。

ここで忠敏はすばやく辞職し、あとを山岡鉄太郎、鵜殿鳩翁に任せたのである。
(どうせこの二人に、狼のような浪士たちはあつかえぬ。いずれ我が手に、戻ってくるに決っている)
二月八日、一同は京に出発した。報告によれば途中、芹沢の我儘は言語に絶し、山岡も手を焼いたらしい。
京に到着してから、清川は仮面をぬぎすてた。隊の目的は将軍警衛よりも攘夷にあると発表し、横浜の外人焼打ちのために、ふたたび浪士隊をつれて、はるばる江戸、三笠町屋敷へ戻ってきたのである。
このとき芹沢、近藤ら十三名は、
「自分らは将軍警衛に京都へ来たのであるから」
と申し立てて、馬鹿正直に京に居残った。この愚直ぶりは忠敏の予期しなかった所であり、かえって清川を、自由に行動させることになってしまった。
計画はすぐに幕府に洩れ、八郎は四月十三日夜、忠敏の講武所師範仲間の佐々木只三郎他に、赤羽橋で切られる。
鵜殿鳩翁、山岡鉄太郎は取締り不行届を責められ、忠敏がふたたび総取締となる。これは忠敏の計画通りである。
かくて忠敏は、庄内、小田原、中津、白河、相馬、高崎の六藩の兵をひきいて、三笠町屋敷をかこみ、浪士をすべて検挙したのである。
これで忠敏の、表むきの俸給分の仕事はおわった。
あとは京に残った芹沢と近藤、土方、沖田らを相手の、第二のもくろみが残っていた。
ひそかに忠敏は、出発の用意をととのえた。折も折、前政事総裁春嶽侯が、忠敏を、藩邸に招いた。

「おかげで、江戸の浪士たちは片がついた。気がかりなのは京に集まりはじめた浪士たちのことじゃ。ひとつ、身分を隠して京に行き、様子をつたえてくれぬか。折しも上様は、京の二条城に入っていられる。その供としてゆけば、目立ちもすまい。浪士取扱いに関するかぎり、老中の名代として振舞ってよろしい。京都守護には、わしからよく、話しておく」

趣味が仕事になり、これにも俸給がつくのであれば、むろん言うことはない。

さっそく忠敏は、供まわりをととのえ、京にむけて、旅立ったのである。

ついでながらこのとき官位も上総介と変り、以後忠敏は松平上総介、と名乗ることになる。

定番に迎えられて、上総介忠敏は二条城に入った。将軍上洛中で城内は混雑をきわめ、上総介に注意する者もいないのは助かった。

ひそかに芹沢鴨、近藤勇らの消息をさぐってみると、一同十三名は壬生の八木某方におちつき、京都守護職に嘆願して、市中警衛の役に任ぜられた、という。

新しい板をけずって、

「新選組」

と名乗り、人数も追い追いふえ、いまでは七十名ちかくになっている、という。

局長として重きをなしているのは、はたして芹沢鴨である。ひごろはさっぱりした豪傑肌だが、酔うと短気になり、隊士からは虎のように恐れられている。腕も立ち、家主の八木邸の唐銅の火鉢を、一太刀で三寸ほども切りこんだことがある。

あまつさえ、金がない、というので押借りをする。なかでも大坂鴻池に押しかけて、四百万円をムリヤリ借りたのが大口である。

これを松原通りの大丸呉服店にわたし、麻の羽織、紋付の単衣、小倉の袴、それに浅葱地にダンダラをそめぬいた制服を注文した、という。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo